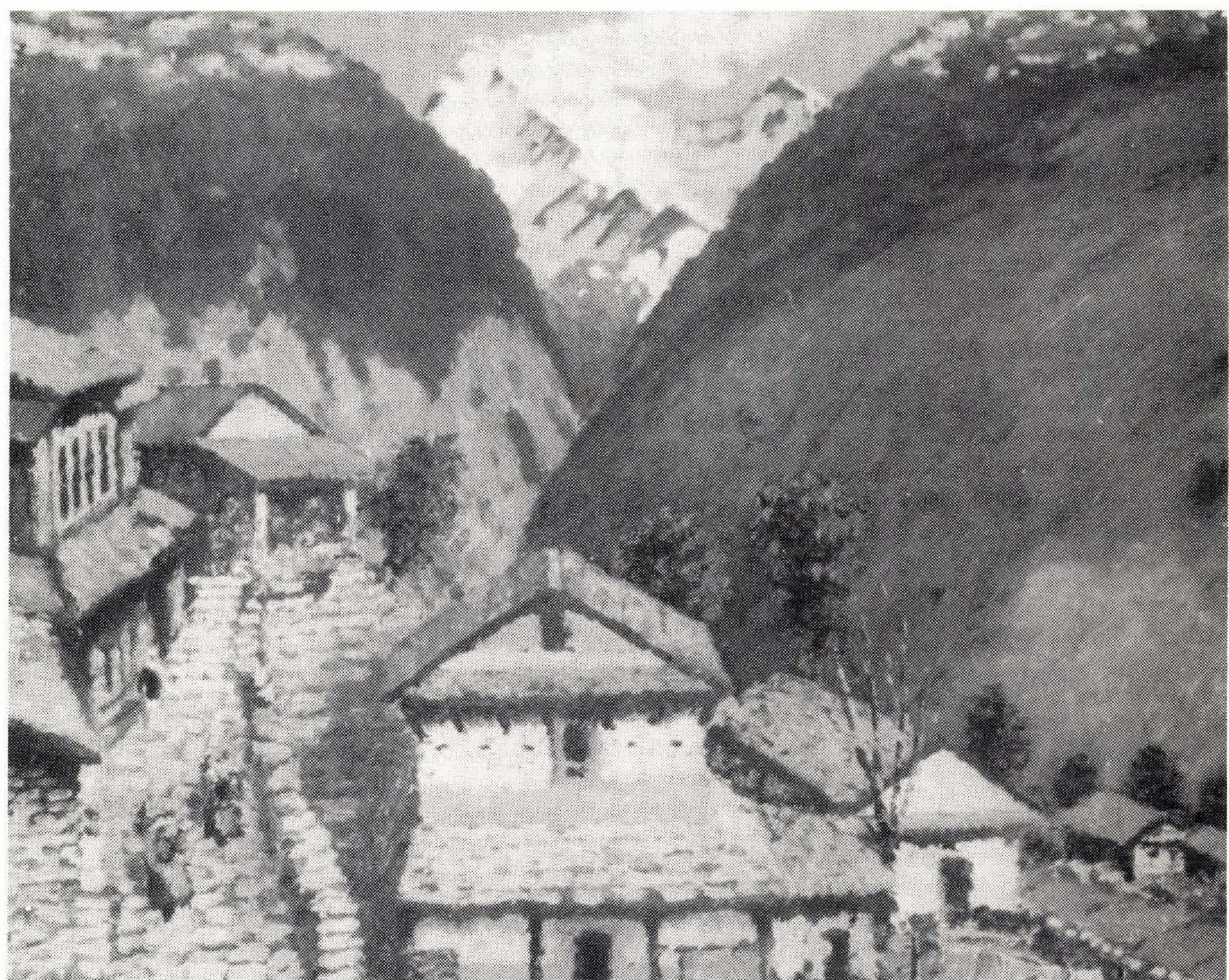


針葉樹會報

復刊第53号



1978.11

表紙の絵

表紙：ウレリの風景、油 20 号、大塚 武

目 次

| | | | | | | | | | | | |
|----------|-----|--------|---------|------------------|----|----------|---------|------|------|------|-----------|
| 下栗部落と御池山 | 夏の山 | 雲ノ平周遊行 | 雨また雨の山行 | CANADIAN ROCKIES | 白山 | 湯桧曽川本谷遡行 | 身辺雑記(Ⅲ) | 山中綺譚 | 会務報告 | 会計報告 | 一九七七年山行記録 |
|----------|-----|--------|---------|------------------|----|----------|---------|------|------|------|-----------|

| | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|---|
| 加藤 | 西牟田 | 小林 | 吉沢 | 近藤 | 岩崎 | 甘利 | 宮城 | 久保 | 望月 | 柿原 | 一 |
| 博 | 伸 | 重 | 一 | | 利 | 仁 | 恭 | 孝一郎 | 達夫 | 謙 | 一 |
| 行 | 一 | 吉 | 郎 | 泰 | 一 | 郎 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| … | … | … | … | … | … | … | … | … | … | … | … |
| 25 | 24 | 23 | 21 | 20 | 17 | 18 | 10 | 7 | 5 | 3 | 1 |

下栗部落と御池山

柿原謙一

深田久弥著『山頂の憩い』所収の「御池山」と地蔵峠にある下栗（しもぐり）に泊つて、そこから御池山に登つてみたいなと思つていた。これを果せたのが昭和五十一年の歳晚のことである。

下栗とか御池山といつても、どこにあるのか見当がつけにくい。いづれも長野県の南端であり、下伊奈郡上村（かどむら）にある。二十万分図幅で「飯田」と「甲府」、五万分では「時又」と「赤石岳」である。

コースは国鉄飯田線の佐久間ダムそいの平岡駅で下車して、天竜川の支流遠山川にそつて、ハイヤーなら下栗へ直行できるし、バスなら上村の上町（かみまち）で下車して歩くなりハイヤーなりで下栗へ着く。時間はかかるが、飯田市からハイヤーで東南方の赤石林道矢筈トンネル（伊那山脈）をこして上村上

町をとおり、下栗へ直行も可能。昔ならば青崩峠ごしで遠山川そいの和田にて秋葉街道を歩き、わかれで下栗に達した。聖岳より遠山川に下山すれば下栗を通る。大戦前の「山日記」をみたら、ここには「聖鳳会案内人組合」があり、日当は夏四円、冬六円位で、組合員に九名登録されていた（昭和十六年版）。

昭和五十一年年末の二十九日、早朝の東京駅新幹線ホームに立つ。関ヶ原あたりが大雪

でダイヤは乱れていた。こだま二一三号は運休となり、二一五号（八時十六分発）となる。一行は四名予定だが、ラッセル役の倉知君があらわれない。彼が欠けることはいささか残念であり、同行山田君は別として小生の体力はラッセル分担に心細かつた。しかし倉知君は年末社用で多忙なんだろう。山田君とわら父子の三名だけで出発した。

年末だというのに空席が多い。だが新幹線には登山姿はそぐいません。登山袋や登山靴でピッケル持参はわれら三名だけ。帰郷される善男善女の車内には山のムードがない。

平岡駅着が一時に近く、少憩してハイヤーで遠山川にそつて進むと、やがて前方に雪白き山がみえた。どの山か見当がつかないが、紺碧の冬空のもとに美しい姿だ。上村上町に到ると、間もなく薄雪のつもつた舗道を登つて、二時十五分車は山腹の下栗部落についた。雄大な遠山谷のうえにそそる聖岳の真白な姿にまず圧倒された。途中から眺めた雪白き山は聖だったのである。素晴らしい大観!!

上村役場から前もつて紹介されていた野牧胤（のほる）さんのお宅にゆく。老夫妻は喜んで宿泊に応じてくれた。「山日記」にあつた案内人組合長のお宅であり、この旧家はここで「井戸端」と呼ばれている。小邑下栗の各戸は、以前はこの井戸水を汲んで飲料水にしていたという。玄関わきに豊かな水量をもつ大きな井戸があった。注連飾りもすみ、遠山谷山腹の家々は静かなお正月を迎えるとしていたのである。

登山具をおろして少憩してからあたりを三人で散歩する。御池山から西南にのびる山稜の中腹、標高千米ほどの地点にあるこの部落

には、昔ながらのおもかげが沢山のこつてい
る。東南に向きたつ一面の山畑からは、山國
特有の作物がとれるし、林業や狩りの基地で
もある下栗は、上村でも富裕な土地であると
いう。夕刻がちかづく。仰けば聖や上河内岳
が美しいアーベント・ロートにかがやいてい
る。昔ながらの山村風情を残している年末の
下栗。来てよかつたというのが実感だつた。
老夫妻とともに電灯のもとで炬燵をかこむ。
突然電話のベルが鳴り、夫人がうけて、「倉知
さんが上町まで来ましたが、いま車がない。
おそらく下栗へ行く」との連絡だとい
う。そして「こんなに暗くなつて寒いのに、
上町でハイヤーまちとは気の毒に!!」と云い
ながら、帰宅するはずの下栗のマイカーを持ち
に電話でしきりに同乗依頼をしてくれた。過
疎地におけるマイカーの効用、合乗りの配慮、
困ったときの助けあい、ということを痛感さ
せられた一ここまであった。やがて幸便をえて倉
知君が玄関にあらわれた。これにて明日のラ
ッセル担当は二人となる。前夜の遅い社用の
せいで東京発におくれても、単独でここまで

追つて来てくれた好漢の厚意は有難い。され
ばこそ野牧老妻お手製の鍋料理をかこんで地
酒の味は、年末の山旅の心に一段と豊潤さを
くわえたのだつた。

満腹して酔いもまわる。二階の大広間にし
つらえてくだすつた寝床にもぐりこむ。炬燵
を中心にして放射状にしかれた寝床。脚があ
たたかくて、吐く息は寒さで白い。階下から
は山田先生特有の醉声がきこえた。そのうち
夜廻りのうつ拍子木のさえた音色が、耳もと
にとどく。夜空には満天の星があつて、明日
の晴天を約束していた。

展望のきく雪原だったが、ここは雪は熊笹
を倒しきらぬ積雪量なので、登山靴は雪をふ
み抜いて笹原深くもぐりこむ。歩きにくいく
とおびただしい。倉知君と小生息のラッセル
が効果を發揮したのはこの時だつた。われら
二人だけだつたら、嫌気がさして山頂南端ま
でゆかなかつたろう。あとからついてゆく私
の歩みは、股間で雪原をまたいでいた。

南端の雪原上で昼食をとる。東側の針葉樹
と白樺のあいまから、大沢岳の白い姿が美し
くみえた。西方の中央アルプスは惜しくも冬
雲のなかにあつた。二時近くまでおしゃべり
したり紅茶をわかしてすごす。

若い二人はどうしても御池山の一九〇五メ
ートル点を踏むといつて雪原を歩きだした。わ
れら二名はもうたくさんだと降りにむかう。
少憩しつつゆっくり下山する二人に、三角点
を踏んだ一行が陽気に追いついたのが分校に
近い林中だつた。四名そろつて五時に井戸端
に着く。聖岳氷壁がまた夕日をうけて紅をさ
していた。疲れましたが壮快だつた。

その夜も老夫妻心づくしの夕餉にむかい、

地酒の味に酔つた。狩人のとつた肉が鍋のなかでやわらかくなり、身体をあたためてくれる。寝につくと今夜も拍子木の音色が遠山谷の闇夜にひびいている。雪原でみた直線一筋の毛ものの足跡が、妙に記憶に残っているのに気がついた。

翌朝も快晴。なんとも晴天にめぐまれた山行だったと思う。よき山旅の帰りにもう新幹線は真ッ平だ、中央線コースでようとハイヤーを呼んで、伊那山脈の矢筈トンネルをして飯田市にゆくこととする。野牧夫妻をまじえて玄関前で写真をとる。本当にお世話になりました。

飯田に近づくと天竜川上空にいつもどおり鳶が舞っていた。急行伊那1号で上諏訪に至り、特急あずさ5号で八王子に向う。大晦日の上り列車なので、座席は充分にあった。

一九七八・九一

父岳を越え、黒岳に登って水晶小舎に泊り、四日目は鳥帽子小舎、五日目にブナ立を下つ

夏の山

望月達夫

去る七月二十日過ぎ、近藤恒雄さんに誘われて、十一年振りに岳から安達太良山に再登した。その時の仲間は八名だったが、そのな

かに小林重吉、佐々木誠の二君と四人も針葉

樹会員がいたし、石川忠延さんという一橋出も加わっていた。鉄山から箕ノ輪山、鬼面山を越えて野地温泉に下り、私はそこから福島に出て帰京したが、一行は翌日さらに東吾妻山に登ったときいた。

て大町へ出た。三日目の後半から晴天に恵まれ、山岳展望のいい山歩きをした。登山者も思ったより少なくてよかつた。この行は久保君が書くことになっている。

九月初旬に木曽の南駒ヶ岳へ登った。在新潟県の笠原藤七さん（古い日本山岳会員）は、全国にある駒ヶ岳にご執心である。氏によると十五座あるそうだが、既にその十二を登っているので、残ったなかでは最高の南駒ヶ岳に是非登りたいと言う。私もこの山は登り残した一つなので同行したいと思い、一橋山岳部員の助力をこうた。幸い佐藤周一、土方浩、両君がサポートを買ってくれたので、予定通り実現できたことは、笠原さん共々非常に嬉しいことであった。

同行は以上の他に川崎精雄さんが加わり、三人の老童の年齢を平均すると丁度七十歳だ

つた。八月三十一日の夜行でたち、飯島駅に早朝着いて、前夜から泊っていた笠原さんと合流、タクシーを使って与田切川の林道を、中小川避難小舎まで入った。

天気が少々不安定で、万一豪雨にでもなつたら中小川からの谷道は、あまり感心しないと聊か心配もしたが、九月一日は飯島の町からでも、仙涯嶺、南駒あたりの稜線がはつきり見えて、それ程わるい天気ではない。われわれは小舎で朝食をしたため、七時四十分予定通り出発した。中小川沿いの登路は、わりによく手入れされているものの、谷がかなり急峻なので登りはきつい。乙女瀑、相生瀑、と進み、梯子、桟道、鎧場、針金が次々と続

き、飛竜瀑を対岸に眺め、川原で昼食、ようやく源流に達して、越百小舎跡へ着いたのは午後一時に近かかった。

ペシャンコにつぶれた小舎のそばには平らな所があり、水場も近く、丁度ひと雨きそうな雲行きでもあつたので、少し早いがテントを張つて泊ることにした。四時過ぎに夕立があつたが、三、四十分で上つた。

二日の早晩、小用に起きた川崎さんが、伊那の町の灯が綺麗だよ、満天の星だ……といふのを夢うつつに聞く。気温もかなり下つたので天気はいいらしい。五時過ぎにテントの外に出てみると、南アルプスの大屏風が、鋸、甲斐駒から延々聖岳までクッキリ姿を現わし、塩見岳の右には富士山の上部まで見える好晴に、一同は心から喜んだ。

六時四十分に出発、越百山の登りではカモシカに出遭つたりした。越百からは仙涯の岩峰と南駒が丁度朝陽をうけてなかなか見事、西には御嶽がいつに変らぬ姿を現わし、白山らしい山までかすかに見える。越百山の西尾根を三十分位下つた所に、赤い屋根の小舎があるという。

快適な尾根をつたつて仙涯嶺の頂にたつたのは九時二十分。南駒が手の届くような近さになり、その左には遙かに三ノ沢岳が頭を見せていた。吉沢さん、佐々木君とで三ノ沢岳に登つたのは、たしか昭和十三年の夏だから、もう四十年の昔になつたのか、と思つたりす

る。さらに遠く左には穂高連峰、笠ヶ岳、乗鞍岳がはつきり姿を現わしていた。百間ナギは聞きしにまさる大崩壊で、その左に赤櫛岳と空木岳とが丁度重なつてゐる。

南駒の登りでは時々息をいれたが、十一時十五分に山頂に達した。二八三七米を算するこの顯著な山には三角点がなく、木の小祠が祀られているだけである。笠原さんは宿望を達して大喜び。七十五歳の同氏が越百の方から登られたのは、たとえ若人のサポートがあつたにせよ、特記に足るだろう。われわれはこの山頂で一時間以上休憩して登頂の気分を満喫したが、昼過ぎから雲霧がまき出して展望はさまたげられた。

岩石の間をかなり急降下して鞍部までくると、右手に摺鉢窪小舎の赤い屋根が見える。小舎は去年建てかえたとか。この付近で空木から來た一人の登山者に出遭つたのが、昨日から初めて会つた人だつた。赤櫛岳へは僅かの登りだが、空木岳の登りは疲れてきた体には、そう樂とは言えなかつた。路傍のトウヤクリンドウ、イワギキョウの花に慰められる。

空木岳の山頂は三時頃で、私にとつては二十三年ぶりの再登だつた。二十分の休憩の後、空木平に下る。直下の駒峰ヒュッテには人影を認めたが、われわれは空木平まで行つて泊りたいと思ひ素通りする。

四十分ばかりで着いた空木平の避難小舎は、小綺麗な小舎に改築されていた。いまは無人だが、盛夏のシーズンには番人がいるらしい。気分のよい小舎なので、今夜はここに泊ることにした。周囲は昔と同様自然環境のすぐれた所だが、今夏の渇水のせいか、水場は往復二、三十分もかかる下方なのが欠点だつた。熱いココアに喉をうるおし、夕食にはブタ汁をたっぷり作つて貰つた。夜は少し冷えたが、私は実に気持よく熟睡した。

三日、早朝は空木の山頂が朝陽をうけてよく見えたが、東天に笠雲のようないやな雲が現われ、間もなく雲霧が出てきて天氣は下り坂となつた。北へ縦走を計画していた学生二君も下るといふ。七時前に小舎をあとにし、池山尾根をひたすら下る。十時頃からとうとう小雨が落ちはじめたが、幸いあまりひどい

降りにはならず、駒ヶ根鉱泉に着いたのは十一時四十分、ここに湯に入つて汗をながし、サッパリして駒ヶ根でビールの杯をあげて昼食をすまし、すいた列車で帰京した。

三日間のうちでは、山上にあつた九月二日が好晴で、目的の山に登れたばかりでなく山の幸を満喫できたのは、まことに仕合せであったが、偏方に学生二名のサポートのお蔭でもあつた。記して心から謝意を表したい。

(一九七八年九月記)

八月に入つて、何處か夏山に出かけようと思案中に、望月さんから左記の計画でお誘いを受け、寝台券も手配して下さることで喜んで同行した。

富山—有峰口—折立、これより歩き出し太郎小屋泊、薬師沢・雲ノ平経由高天ヶ原山荘泊、温泉沢遡行、赤牛岳登頂、読売新道を下り、奥黒部小屋泊、平・黒四経由大町より帰京、以上計四泊の山旅である。

八月十五日夜、連日快晴猛暑の東京砂漠を脱出、寝台列車に乗り込む。私は前夜自宅でクーラーつけっぱなしで寝たため、咳と痰で咽喉の工合が悪い。

十六日早朝富山より電車、バスと乗りつぎ折立に向う。富山市内では雨だったが、山に入るにつれ、曇天から薄日がさすようになり天氣は回復してきた。この雨を東京に持つて



雲ノ平周遊行

久保孝一郎

行つて降らせてやりたい程、今年の夏の東京は連日干天猛暑である。

折立まで交通機関は順調で九時頃歩きだす。登山口の路傍に愛知学院大学十三名の追悼碑

があり一礼を捧げた。一八七〇米の三角点を過ぎてからは緩い上りの草原で、スキーに適地だ。太郎小舎が稜線に見えるので、初めての土地でも勝手が分り楽である。九時頃歩きだして二時過ぎに小舎到着、四時頃からは雷雨が始まった。

明くる十七日夜来の雨がひきつづき、行ける処まで出かけようと、ゆっくり発つ。結局薬師沢小舎で登山姿のまま正午まで待機したが、雨は激しくなるばかり、部屋に上りこむ。石油ストーブ設置の乾燥室があつて大いに助かる。部屋の窓から目前の黒部本流の増水ぶりを眺めていると恐しいほどである。

明くる十八日雨はこやみになり、出発する。小舎前の吊り橋を渡り、雲ノ平への樹林帯の急登がすぐ始まる。急登約二時間後、傾斜は緩み雲ノ平に入ってきたことが地形で分る。昭文社地図では雲ノ平山荘まで二時間とある

が、私達は三時間半を要した。この頃より雲が切れ、夏の強い日射しがさし、黒部源流を巡る山々が見え始め、これから目ざす祖父岳も現ってきた。

山荘より緩い上りが次第に傾斜を増し、左・尾根通しの径と右・祖父沢源流テント地の分岐となる。私達は左をとったが、切り開いた這松が横になびいてリュックに当る感じで、かえって右が能率的だったかもしだぬ。

露岸地帯の急斜面をつめて祖父岳頂上に立つ。この頃はすっかり晴れ渡り黒部源流の山やまの眺望に恵まれた。これより若干の起伏を経て岩苔乗越に下り、さらに裏銀座通りの稜線上、ワリモ岳の肩へと上る。山の斜面は午後の日射しを受けて暑い。三時半ちかく水晶小舎到着、食事付を無理に頼んで宿泊を申込んでおいてから、水晶岳を往復する。この頃から私の頭痛が激しく、切角の夕食も喰べられずに早々に寝込んでしまった。夜、小用に外出すると霧の海で、明日の天気が気になつたが、翌十九日は快晴で、御来迎も拝み、北アの中心的なこの位置からの眺望は全く

素晴しく、来た甲斐があった。

一夜の休息で私の体調も回復し、晴天下に氣分よく出発することができた。小舎から瘠せた岩稜を東沢乗越へ下る。東沢源流地帯が

よく俯瞰されて、遡行の誘惑にかられる。乗越には石仏がおわしまして、その前を往来する旅人を見まもってくださる。野口五郎岳の大斜面まで、岩稜はさらに続くのだが、途中で遅れがちな望月さんを休んで待っていた積りが、私の視野の死角部分を通過されたのか、私は望月さんを探しにもの径を戻り一時間空費してしまった。私はしばらくして行きちがいの登山者から望月さん（黒ゲートルのステッキを持った特徴ですぐ確認できた）が先行しているのが分つたが、望月さんは私が疾走したものと思われたらしい。

望月さんが無事なのを知つて一安心、マイペースでこの大斜面を登りきり、野口五郎小舎の小舎番にお茶によばれて昼食をとる。ここで私が分けてやつた梅焼酎が小舎番に大いに喜ばれた。

午後からは雲が出て、日かけになると涼し

くて助かる。三ッ岳の直下をまき、鳥帽子小舎に大きく下つていく。雲は雷雲となりそうで、降る前に小舎に到着できるようとばす。鳥帽子の池のほとりのテント場をすぎるとすぐ小舎だ。ここで望月さんと再会して、互いの無事をビールの乾杯で祝う。やがて雨が沛然とやってきた。しかし暫くして止んだ。

夜は月の光が小舎の窓から差し込んで、ロマンチックな夢心地となる。

雨また雨の山行

宮城恭

この夏八月から九月にかけての四度の山行が、三度迄雨に降られ目指す山に登れなかつた。「雨男」と呼ばれても返す言葉がない。渴水に悩む福岡市が小生を招けば雨が降ることは請負えそうである。

一、幌尻ボロシリ岳

八月三日昼過ぎ、炎天、四〇度近い温度の

明くる二十日、帰りを急ぐ私は鳥帽子岳頂上を往復する望月さんと小舎で分れて、ブナ立尾根を下山、またもや猛暑の下界へと舞い戻った。

今回は一日悪天のため後半の予定コースが変更されてしまつたが、来夏はぜひ高天ヶ原で温泉に入り、赤牛岳に登りたいと望月さんと約束した。

中を北海道日高の振内に着いた。一行は通産省現役OBの山の会である一水会の九人。久保旅館という宿の部屋にじつとしていても汗が出る。北海道に来た甲斐がない。こんな好天に明日は雨とは考えられないのに、天気予報は明日は雨で午後に止むということである。明日は車で額平川沿いの道を入れる所まで入り、幌尻山荘に泊り、翌日幌尻岳に登る予定

である。

朝になつてみると雨が降っている。数日前本土を通過し日本海を北上した台風のなれの果の低気圧が北海道北部を横断するため雨になつてゐるのだ。午後には雨は止むという天気予報を信じてマイクロバスに乗り二時間後、雨の中を歩き出す。ダムサイトにある北海道電力の二つの建物に着いたのは昼近くである。その二つの建物は嚴重に鍵がかけられ、軒は短く雨やどりはできない。濡れ乍ら昼食をとり、わらじをつけて徒渉の支度をした。雨足の段々と激しくなる中を第一回目の徒渉。これから十数回の徒渉がある筈である。ここから第二の徒渉地点までは川岸を巻き乍ら登り、濁流を下に見ながら岩壁をへつる所が二、三箇所ある。荷がかなり重い（小生は十三キロ）のに雨の中こんな所をへつるのは全くつらい。一時間程で第二の徒渉地点に着いたが、濁流が渦巻き流木が多く渡れそうにない。一同相談して引きかえすることにした。この先まだ十数回徒渉のあることを考えれば当然の結論だが、さつき渡つた所がその後の増水で渡れる

だろうか、これが一番の心配であった。果して第一の徒渉点は水量が増え、水が濁り川底が見えない。私は二度試みて引き返した。腰まで水がくる上に速い流れを見ていると目がくらくらするし、足下の石がぐらぐらする。三度目は水面を見ないで対岸を直視し乍ら、足下を確め慎重に渡った。一同無事に徒渉を終えた時はほんとにほっとした。北電の建物のまわりでまた濡れ乍ら乾いた下着に着替えをする。中にはガタガタふるえている人も居て強行していたら遭難ものであった。それでも北電の建物はひどい。軒もない、窓も鉄格子がありこわして入ることもできない。

三日後札幌で友人である北電の重役に会った時、「あの建物の他に雨やどりできる所は数キロ四方全くない」というのにひきしきえないのはひどい。ひさし位つけておいてもらいたい。」と頼んでおいた。

しかしこれからが大変であった。車は帰してしまったし、数キロ先の営林署の小屋が頼りだ。そこから電話で車を呼ぶことにして、雨の中を歩く。薄暗くなり始めた頃やつとそ

の小屋に辿りついたが、ここには電話がない。若い一人をから身で一番近い部落迄二十キロ走らせることにした。営林署小屋は狭く泊ることもできない。我々はまたとぼとぼと雨が降つたり止んだりする中を懐中電灯の光を頼りに下つた。迎えの車の光を見た時はほんとにうれしかつた。

(追記一日程の都合で幌尻岳はあきらめ翌日は車で日高から富良野の山部へ出て、その次の日に芦別岳に登つた。)

二、守門岳

八月二十五日から四日間、全くの連続好天に恵まれ北ア、燕一常念一蝶の縦走を楽しんだ。九月に入り、望月、佐々木両兄が守門岳に行かれるとのことで参加させてもらうことにした。

九月十六日、明日は晴という天気予報を信じながら、只見線入広瀬駅の前にある松屋旅館に入った。全く久し振りの望月、佐々木両先輩と一緒に、宿の心暖まる山菜を主とした料理に一献をかたむけ、寝につくまでは最高

の小屋に辿りついたが、ここには電話がない。

であった。

この時も九州、中国を襲つた台風が北陸を通つて明日は北東に抜け天候は良くなるといふ予報であった。朝六時に宿を出るつもりが、雨が止まない。雲は時々切れ、日光がもれることもあるがまたすぐ激しい雨。典型的な荒れ模様の天氣である。雨の止んだ所を七時に車に乗り守門岳の南西の登山口である藤平山のふもとまで入る。雨がまた降り始める。暫く登るうちに雨足は激しくなり、木蔭を求めて雨着を着ける。急坂を小半時登るが雨はますます激しくなり引き返さざるを得なくなつた。車で来た道を引き返すといつこのうらぶれた気持もまた風情があると強いて思うしかない。しかし山路に咲き乱れるツリフネソウとこの山村の風景は抜群に美しかつた。寸時止んで激しく降るどしゃ降りは傘の布を通して見る見るうちに道が河になる。途中、農家の作業小屋で雨やどりし、テルモスの紅茶にウイスキーを入れて飲んだ。宿に戻りびしょぬれの靴下をしばり小憩の後、只見線の客となつた。私が参加したために雨になつたのなら、

ここに両先輩に対し深くお詫びを申し上げる。名の通り守門岳の門の守りは堅かつた。

三、仙丈岳

九月二十二日、かねて久保さんにさそわれていた仙丈岳へ登るべく朝早く新宿発、こまがね一号の客となる。この時の天気予報は秋雨前線がやや南下して明日は曇時々晴であつた。伊那市よりバスで戸台へ着き河原で昼食。

小生は辰野で買った杣人弁当というのを食べたが得体の知れぬ煮魚の古びたようのがおかずでもう二度と買う気はない。アザミの中でも最も大きいといわれるフジアザミの美しく咲き乱れる河原を歩き、四時頃に丹溪山荘に着く。宿の主人上島老人が暖く迎えてくれる。その夜の客は我々のみ。宿帳を見るところの前の日曜以来初めての泊り客が我々らしい。附近で採れたシメジの味噌汁は誠にうまかつた。

明朝は三時起床四時出発ということで八時頃には床についた。なかなか寝つかれず十時頃小便に起きて外を見たが星が出ていて明日

の天気は晴間違いなしと思った。

四六時中聞えている溪流の音にしては騒々しいと気がついて目が覚めると屋根を打つ雨の音だつた。午前三時、真っ暗。部屋のランプをつける。南アルプスはこんなふもとでも電気は来ていない。未開通ではあるが南ア、スーパー林道がすぐ上を通つているというのに。

この早朝に、この雨の中を懐中電灯の光を頼りに標高差千五百米もある仙丈岳へ登るんだ。そんな元気のある人がいたらお目にかかりたい。さすがの久保さんも出発を見合せようと言つたのに小生もほつとした。

今日は土曜、もし明日登つたとしても日曜中に下山はできないし月曜には東京に仕事があるとなると下山するしかない。降りやまぬ雨に業をにやし、八時半下山の途についた。

それまでの間薪ストーブを囲んで山荘の主人の話を聞いたが、上島さんは戦後苦労の上満州を引揚げられて、戸台に丹溪山荘という旅館を持ち、今は奥さん、御子息夫婦お孫さんと楽しく暮らしている由、また仙丈「馬の背

小屋」の主人はこの御子息のこと。この辺が赤河原と呼ばれるのは溪流の岩が赤色を帶びてゐるからで、秋の紅葉の美しいこととも合わせて丹溪山荘と名づけたそうである。

雨の中を登つてくる登山者にすれ違うのは、下山する身にとつて苦痛であった。戸台に着く頃には雨は上がり、振り返れば雲の切れ目に甲斐駒、仙丈の頂が見える。なんたる非情。



CANADIAN ROCKIES

甘 利 仁 郎

ナムティジャーリーといふ

名のロッジ

アルバータ州のバンフとジャスパーの二つのナショナルパークを結ぶハイウェイは、カナディアン・ロックキーの正に核心部を貫いて走っている。氷河を抱いた三、四〇〇〇米の岩と氷の峰々がそそり立つその谷間のタンネの森と広い湿原の中を、片側二車線の整備された舗装路が数百キロにわたって走り抜けている。

そのハイウェイのバンフに少し寄ったあたりに、ボウという名のエメラルド色の小さな湖がある。氷河の後退によつて生れたこの湖は、五キロ程上流のボウ・グレイシャーの末端の懸崖にかかる大きな滝を水源にもち、氷河湖特有の濃いエメラルド色の湖水をたたえ

て、深いタンネの森の中に眠っている。

そして湖畔に、ナムティジャーリー・ロッジと呼ばれる、丸太造りの外観をもつ、品の良いロッジが立っている。上高地の旧帝国ホテルを小さくしたような、赤い屋根の素適なムードをもつ小ホテルである。ロックキーの初期の名ガイドであったトムソンソンじいさんが建てた山小屋がその始まりであるようだが、ナムティジャーリーといインディアンの言葉からは、

素朴な好ましい響きが伝わってくるようだ。
一五〇〇米というその標高のため、朝や夕方、湖で釣糸など垂れていると、ひんやりした冷気は、八月とはいえ肌寒いくらいだ。マスが釣れるようだが、魚影はそれ程多くない。むしろ、湖畔にはリスやモルモットをはじめ野生物がむれ遊び、季節によつてはカモシカや大鹿などが現われることもあるそうだ。

ペチカの燃える落着いたラウンジで、深々とソファに埋り乍ら、氷河の崩れ落ちる音に耳を傾けた雨の夜。そして登頂を終えて、ハイウェイを車で飛んで帰り、分厚いビフテキとボルドーワインに舌づつみを打つた祝杯の夕。

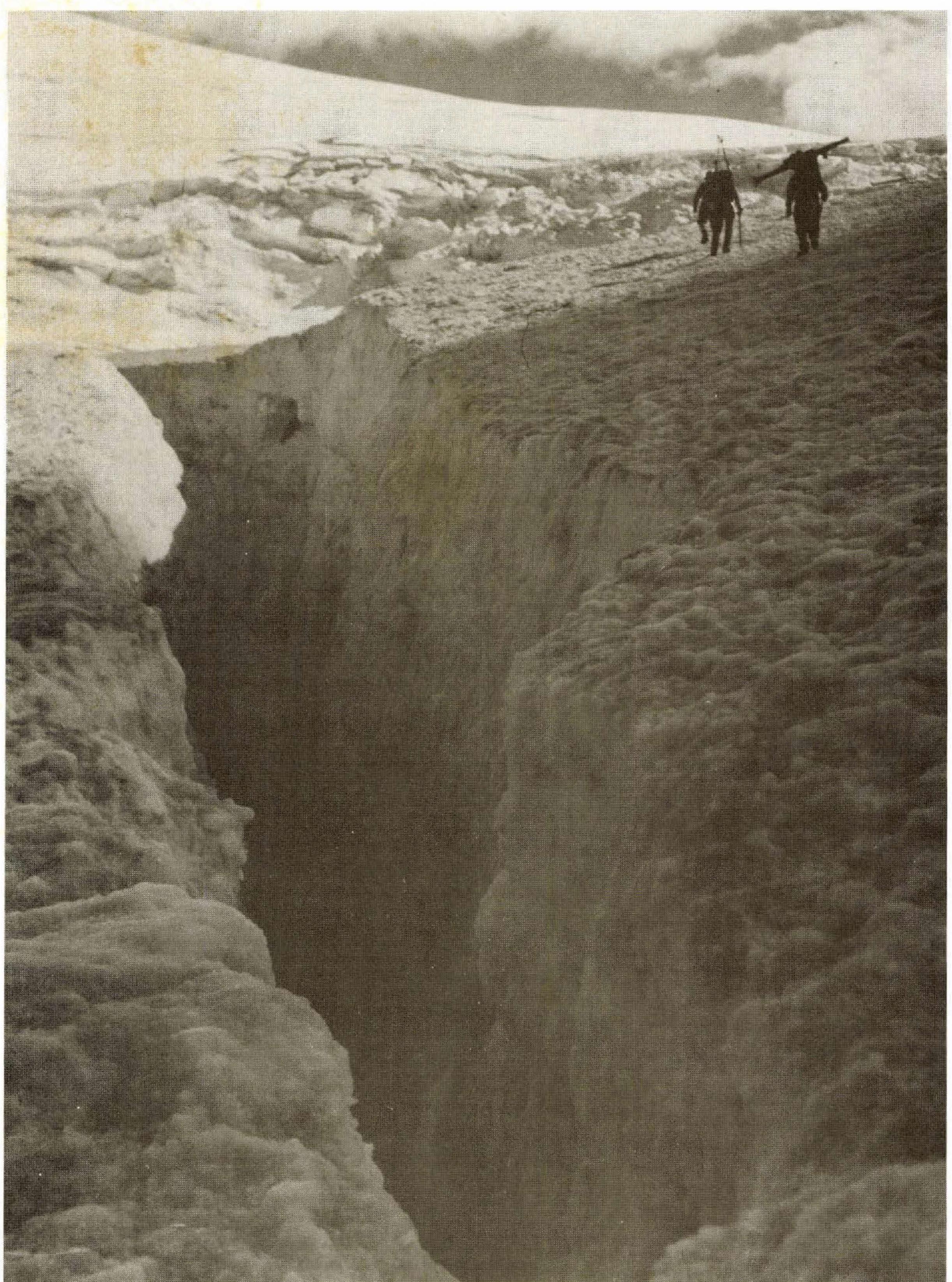
八月十日から二十日迄の十日間、私達はこのロッジをベースにして、ある日は、峠越えのトレッキング、ある日は数百キロの山岳ドライブ、ある日はクレバスを縫つての氷河スキー、そして、ある日は雪と氷の山頂へと、カナディアン・ロックキーのサマー・ホリディを二十人の仲間と一緒に十二分に楽しんだ。

自十才至七十八才の遠征隊

下は十才から上は七十八才迄、このパーティの構成は誠に奇妙である。パーティーの名は紫峰山岳会創立三十周年記念、カナダ遠征隊。立川高校山岳部OBのグループである。中年のOB達が、どこかに行こうということになると、家庭によつては、家族も一緒に連れて行かざるを得なくなり、小学生、中学生、



*Mt. Andromeda on the Columbia Icefield,
Canadian Rockies, 1978*



*Crevasse and Ski
on the Athabasca Glacier,
Jasper National Park,
Alberta, Canada, 1978*

奥さま、おじいさん、おばあさんと、実に多
彩な顔ぶれが集まることになった。山岳会員
の中でも、年によつては、オレは釣だけ、ス
キーだけ、ハイキングだけ、など好みの範囲
もだいぶ片寄つてくる。そして休暇のとれる
日数も大体において十日間迄、それを何とか
延ばして十四日間。かくして、十才と七十八才、
二十名で二週間のカナダ遠征隊が出来上つた
のである。

はじめは、その高齢を心配された七十八才
の老登山家も、そして運動不足の中年登山隊
も、互に、ゆうゆうとおのれのペースを守り、
つつがなく楽しい夏休を過すことが出来た。
こんなグループの山行もこれからは面白いの
ではあるまい。

ヒドンクレバスの奈落の闇

アルバータ州の首府エドモントンで四台の
レンタカーを借りて來たので、我々のパート
ナーは実際に機動力に富んでいる。まず最初に
五百キロ程飛ばしてジャスパーの町で食料品
やら、登山道具の買い集め。何しろ、十数年

も登つていなかから、登山靴から買わねばな
らない。しかし、円高は有難いもの。食料に
しろ、道具にしろ、日本よりよほど安い。本
当に良い時代が來たものだ。

最初の目標はMtコロンビアである。登山メ
ンバーは八名、二十九才から四十八才の構成
である。アサバスカ氷河をつめて、コルにテ
ントを上げ、そこからスキーで北米大陸最大
のコロンビア・アイスフィールドを横断して
Mtコロンビアを往復する計画である。ナムテ
ィジャー・ロッジからジャスパーに向つて、

一五〇キロを一時間で飛ばすとアサバスカ氷
河のモレーンに着く。この氷河はカナダの觀
光写真には必ず出てくる有名な氷河で、觀光
用の雪上車で誰でも容易に氷河の上に立つこ
とが出来る。麓には大きなホテルがあり、少
し上には雪上車の発着駅がある。ホテルの隣
の国立公園事務所に山行届を出し、発着駅の
前の駐車場に車を二台乗り捨て、雪上車の觀
光客を横目に、アサバスカ氷河を登る。三十
分も歩くと、そこが雪上車の終点、ようやく

本物の氷河に入る。

中央にはクレバスが無数にあいていてルート
がとれず、右端にルートをとつて登る。右
上には懸垂氷河の末端が巨大なブロック群を
形成して今にも崩れ落ちそうで氣味がわるい。
その真下を通過するとき、念のため隊を二つ
に分けて進んだが、その先行の隊の真上に巨
大なブロックが落下。一瞬、胆をひやす。し
かしあまりの高差に、ブロックは途中崩壊し
つくして雪のシャワーになつただけだった。

中段の台地でサポートの二名は荷上の食糧
をデポして下にくだる。あと一時間も登れば
氷河は終つてコルにテントを張れるから、そ
したら今日中にデポ地迄食糧を取りに来れば
良い。そう思つた我々六名は、殆どの食糧を
その地点に残したまま、気楽に氷河を登り始
めた。しかし、まもなくその考えのあまさを
徹底的に思い知らされることになった。中段
から上の氷河は下からは見えなかつたが、無
数のヒドンクレバスが走り、うつかり足を踏
み出すと、足底は奈落の闇。一步一步をピッ
ケルできぐり、右に左にスノーブリッジを探
して迂回しなければならなかつた。うつすら

と新雪の覆つたクレバス帯の恐ろしさを痛感させられること、それから四時間、やっと登り着いたスノーコルに、ようやく天幕を張り終えた時には流石に長いカナダの日も西に沈んで、午後九時を回っていた。

夜半から雪になり、翌朝は十米先も見えないようなガスと降雪になつた。こんな天候の中でクレバス帯を下るのは気味が悪いが、デポの食糧を取りに行かなくては食べるものがない。それに今日再び登つて来るサポートの二名がクレバスに落ちることが何よりも心配だ。私を含めた三名が、風雪の中を昨日のデポ地迄迎えに下ることにする。昨日の踏跡はあとかたもなく、視界も殆ど十米。クレバスには昨夜采の新雪が一尺程つもつて危険この上もない。アンザイレンし、しかもミドルの私がトップに立つて両端の二名が上から確保するという慎重な方法で下る。しかし遂にてん落。足底の下がすうーと何もなくなつたと思ふと真直ぐ下に垂直につい落。ザイルにぶら下つたまま上を見ると七、八米上に巾五十センチ程の白い窓が見え、下を見ると大きく

広がつた真暗闇。何百米あるのか見当もつかない奈落の拡がりである。幸い、巾が狭いので、ピッケルとアイゼンと背中のフリクションで、チムニー登り、自力でクレバスを脱出する。

クレバスの少し先に幸いにテントが三張りあつたので、その傍でツェルトをかぶつてしまはらく休む。風雪はおさまらず、これ以上の行動は危険と感じたので、テントのアメリカ人達に伝言をたのみ、ストックを目じるしに途中数ヶ所に残し乍ら、再び上のテントに戻る。

Mt アサバスカ登頂

帰り着いたテントの前。何とテントの入口がない。そして天井も一部ない。テントに残っていた三人は髪を焼くやら、鼻をこがすやら。ボンベからもれたガスに引火してストーブが爆発。テントは無残にも、入口と天井に大穴を開けていた。

我々が着いてからこの山域は天気が悪い。午前中は雨で午後は曇というパターンが続く。滞在もあと二日という最後の頃、この天候のパターンを見越して、朝ゆつくりと小雨の中をロッジを後にした。アサバスカ氷河に着く頃には、果せるかな天候は好転、大きく晴れ間が見え始めた。氷河下のホテルでゆつくりと朝食を取り、ハムバーガーを昼食の弁当に買い込んで雪上車発着駅に向う。駐車場に車を置き、歩き始めたのはもう十時を過ぎてい

て氷河を下る。サポートの二名は昨日は大分遅くなつてアメリカ人のテントに着き、更に登つて我々のテントを探したが見つからず、やむなくアメリカ人のテントに泊めてもらつたことである。皮肉にも雪は止んで、晴れ間も見え、クレバス帯もそれ程の危険はない。安全な地帯では、スキーをかつぎ上げた四人は、思い思いでスキーを楽しみ、せめてものうさを晴らし乍ら、氷河の下の駐車場に下つた。

た。今日のメンバーは四名。29・34・39・45才という構成で、勿論私が最年長である。

駐車場からアサバスカ氷河右岸のガラ場を少し登り、左側から落ちてくる氷河に取りつくために、その末端の滝の左側をからみながら登つて行く。岩場に雪がうっすら積つていったが、ザイルをつける程ではない。滝の岩場を登り切るとすぐ氷河の上に出る。クレバスも殆どない、单々たる氷河の登りである。右手にはMt.アンドロメダの山頂から素晴らしい岩と氷の壁が落ちこんでいる。そしてその山頂から左に岩と雪の稜線が延々と続き、氷河の左上部のアサバスカ山頂へと連つている。ルートは氷河の左をつめて急な雪壁を登り、上の稜線の左端に上つて、稜線を左に辿り、アサバスカ山頂に至る、殆どが雪壁と雪稜から成る登攀である。ガイドブックによると往復十二時間。十五年も山らしい山に登つていない私には、体力が持つかどうか自身が持てない。氷河を登つて左の急な雪壁へと、一步一歩ゆっくり登る。三歩目のステップが丁度目の高さになるから五十度位はあるだろうか。



Mt. アサバスカ(左のピーク)とアサバスカ氷河

氷河に入つて三時間程でようやく稜線の一部にはい上る。天候は益々好転、青空がひろがる。風があるのでヤッケを着て、ここからアンザイレン。岩と雪の稜線を辿り、四十分程で雪のドーム。しかしそこは最高点ではなく、一度下つてその雪稜の先に、アサバスカの山頂はあつた。見下すとホテルの屋根が豆粒のように見え、通いなれたハイウェイがうねうねとくねつていて。そして見はるかすロッキーの山波。三六〇度、地上の涯から涯まで、それは正にうねり、くねる山また山の世界だつた。南に見下す、サスカチワン氷河の長大な流れ、西にアルバータ、ロブソンの峰々。

その間にひろがる緑のメドウ。そこにはかつて大鹿が群れ遊び、インディアンが平和に住んだ草原が眠つていて。近代文明のアメリカや、カナダ、そんなものがこの山波の下にあるのがおかしいような、平和で美しい、白い山と緑の谷の連りだった。仲間達はしきりにシャッターを押す。カメラに用のない私は唯山波を見わたすだけだ。あの向うに太平洋がそしてあの向うにアラスカがあるのか。そう

だ今度はアラスカへ行こうか。いや、それより、やはり天山だ。タクラマカンの砂漠の果ての、あの未踏の山域だ。そうだ行きたい。どうしても行こう、あのシルクロードの山々へ。

白山

岩崎利一

かねてから加賀の白山に登りたいと思つて居たが、はからずもこの九月二十二日から三泊四日で行く機会に恵まれた。

勝山市では斎藤三郎君の会社が目についたので、電話したら鶴岡に行つて居られるとのこと。ここは白山の麓の素晴らしい環境で、町はずれの平泉寺白山神社の苔蒸した広大な神域を想起するだけでも、勝山の清く澄んだ雰囲気が羨ましくなる位だつた。

翌九月二十三日は曇空で、今にも降り出しそうな天氣。白山温泉からバスで約六キロの別当谷出合に行き、そこから登り出す。道は立派で迷うおそれもなく、砂防新道経由室堂までゆっくり五時間程で着いた。名にし負う白山の高山植物も、花期を過ぎて居るので、ナナカマドの赤い実やトリカブト以外に余り眼につくものもなく、些か淋しい感じがした

けれど、久し振りに山歩きらしい登りをしたのは嬉しかつた。

室堂には幾棟か夫々数百人宿泊出来る小屋があり、この日は連休ということもあって、かなりの人数が泊つて居た。ひと眠りしてか

ら、雨の降らないうちに頂上と池めぐりをして居たのは妙だつた。考えれば、眠れないことにして居たのは妙だつた。考えれば、眠れないこととしても、実際は結構寝られて居るものなのかも知れない。

まことに有難いことに、九月二十四日の朝に出かける。霧で見晴らしは無いが、二七〇二米の頂上は流石に立派だ。夏には神官が居て色々の神事が執り行なわれることだが、今は奥宮が強風に耐えて厳かに登拝者を迎えているだけである。

霧の中に浮ぶ幾つかの池めぐりは、夢幻の中を歩く感じで約二時間。お花畠のナナカマドの紅葉が実に鮮かだつた。

御嶽、乗鞍、穗高、槍など、懐しい山々が室堂々とスカイラインに並び、遙かに劍らしい山まで現われた。昔から「あれが加賀の白山」と遠くから言つてばかり居た白山に、今こうして立つて居るというのが、何でもないことの様でもあり、意味深いことの様にも感じられるのだつた。

室堂に着いた頃から雨が降り出し、嵐の様な吹き降りになつて一晩中続いた。一人二枚の毛布では、持参の衣類を全部着てヤッケま

で装備しなければ眠れない位気温が低い。富士山の八合目の小舎で寝たときの様に、頭が重い様なので、持参のアスピリン一錠をのみ、売店で買ったサントリーの小瓶で軽く一杯やつて早く寝る様にした。隣り合せの人はもつたが、翌朝余り眠れなかつたとしきりにこぼして居たのは妙だつた。考えれば、眠れないことにして居たのは妙だつた。考えれば、眠れないこととしても、実際は結構寝られて居るものなのかも知れない。

降路は大倉山尾根を経て大白川ダムに向う。

この道もしつかりついて居て危な氣はなく、大倉山の小舎も立派な避難小舎だ。岳樺の巨木に驚いたり、遙か下のダムの色に見とれたりしながら急坂を降り、ダムの傍の休憩所に着いた。ここには温泉があつて、一休みには快適だ。ここでマイクロバスを待ち合わせ、大白川温泉（平瀬）に向つた。

今回は、家人がメンバーになつて居る御仲間に誘われ、一行三十四名（内女性十五名）で行つた。平均年齢六二才位で、七十以上の人々も沢山居られ、その矍鑠たること驚くばかりだ。一人の事故もなく全員登頂し、元気に帰京した。

九月二二日（曇） 東京（八・三〇）＝名
古屋＝福井（一二・三〇）＝勝山（一三・二〇）＝白山温泉（一六・三〇）

九月二三日（曇後雨） 白山温泉（六・五〇）＝別当谷出合（七・〇〇）＝甚之助ヒュッテ（九・三〇）＝室堂（一五・〇〇）

九月二四日（曇後晴） 室堂（八・〇〇）＝大倉山小舎（九・三〇）＝大白川ダム（一・一〇）＝平瀬（一三・三五）＝荻町合掌

部落往復（一六・〇〇）＝平瀬泊

九月二五日（晴） 平瀬（九・〇〇）＝遠山家＝御母衣ダム＝高山（一〇・五〇）＝名古屋＝東京（一六・五六）

（五三・一〇・六）

湯檜曾川本谷行

近藤泰

四月から社会人となり、毎朝学生時代とは反対の方向へ向う満員の中央線に乗るようになり、早五ヶ月が過ぎようとしていた。吊り

皮にぶら下り、眠い目で車窓を流れすぎる町並みや車の列を見ていると、今自分を運んでいるこの鉄路が、穂高や白馬や鹿島槍、そうして懐しい高山に続いているという事実がまる

前神氏と、三年生であった熊さんこと兵藤氏と、まだ社会人の疲れが体形をくずしていくないと信じている僕の三人であった。

八月二十七日、土曜日、例によつて夜行の鉄道に上野より乗り込み、途中長岡より乗り越してきた兵藤氏と水上駅で合流し、朝まだ来ぬ土合駅に降りたのは午前三時頃であった。夜行でろくに寝れなかつたので、まずはどこかで一眠りしようと、例年五月の谷川雪上訓

まったくようだ。当然と言えば当然なのではあるが、今まで身近にあつた山が他律的に遠ざけられてしまうと、よけいに山に会いたくなれる。それで週休二日制の恩恵に預かれない僕にとつては、日曜日はまさに値千金の一日であり、日曜の朝はどこか山麓の小駅に降り立ち、今日一日に胸をふくらませていきたいと思うようになった。それで今回は胸ならぬ腹のふくらんだ三人組の山行となつたわけである。山域は連日熱帯夜が続くという猛暑の今夏、沢登りが良からうということで、谷川連峰、朝日岳北西面の沢、湯檜曾川本谷に決定した。メンバーは僕が一年生の時リーダーであった

練合宿のテントサイトにする新道沿いの西黒沢の天場で仮眠をとる。二時間との約束が前夜四時まで飲んでいたという前神氏を初め皆睡眠不足気味で、六時過ぎまで惰眠をむさぼり、歩き始めたのは夏の太陽が山道に照りかえす六時半すぎであった。そのため虹芝寮を通り過ぎ、湯桧曽川遡行開始地点の魚止めの滝についたのは七時四〇分頃であった。いよいよ水遊びができると、地下タビをはくのも早々に魚止めの滝に向うが、何とガッカリさせられることに、過日前神氏が単独遡行を試みたおりに滝ツボに落ちたというこの六メートルの滝も、大きな流木で埋まっており、ワラジのフリクションを使うまでもなく、あっけなく通過してしまった。水量も連日の晴天でかなり少なくなっているようで、滝上のゴルジュも高巻く必要がなかった。また天気に恵まれ、絶好の沢登り日和となつた。暑い時にはこれに限るとばかりに、わざわざ滝ツボで泳いだりしながら、のんびりと小滝を拾っていくとやがて十字峡に着く。ここで本流は左側に急角度で折れ、正面には抱返り沢の

五〇メートル垂直滝が飛沫をとばしていた。最初はこの大滝を直登するのかと少し緊張したが、左折した本流は小滝とナメが連續する綺麗な沢となり、そうこうするうちにようやく最初の難門、二〇メートルの大滝に着いた。

一応ザイルや三ツ道具を持参したが、それを使うまでのことはないとノーザイルで右岸を登る。ところどころに残置ハーケンがあり、水量が多く濡れていれば肝を冷やしそうな所であった。

さて二〇メーターラの滝を越すとまた平凡な流れとなり、傾斜の弱い、西岸が開けた明るい沢になってきた。滝もさして難かしくなく、水量も多くないので、多少氣もゆるみいつものことではあるがとりとめもない冗談を言いながら、沢筋をたどつていくと、その单调さを終らせるがごとく前方に、白いアーチが見えてきた。まさかと思ったが、この標高も低かったのである。既に先行の女の子連れの大パーティが取りついていた。右端よりとりつき水流の裏をくぐり抜け左側を登るらしいが、ずぶ濡れになるらしく雨具をつけて登つている女人もいた。スマートな山行を志す私としては雨ガサを取り出し優雅に攀ろうと思つたのであるが、あまりの水圧にかきの骨が折

ばかり続いていた。昨冬の剣合宿以来ともかく雪というのに触れた記憶がないだけに、とても懐しく思つた。穂高で剣で、こんなスノーブリッジの下をくぐつたこともあつたけれど、しばしの感概に浸りかけんとしたのだがその時、感性を逆かなでするような悲鳴が谷間に響き渡つたのである。前を行く前神さんが泥に足を取られ、丁度スノーブリッジの門で沢に滑り落ちていったのでした。水に濡れただけですんだが、彼の性格を知る僕としては何か見てはいけないものを見てしまった気がしたのであった。

さてスノーブリッジをくぐり、快適な小滝を越えて行くと、広く深い釜をもつ一〇メートルの垂直の滝に出会つた。丁度送電線直下のあたりである。既に先行の女の子連れの大パーティが取りついていた。右端よりとりつき水流の裏をくぐり抜け左側を登るらしいが、ずぶ濡れになるらしく雨具をつけて登つている女人もいた。スマートな山行を志す私としては雨ガサを取り出し優雅に攀ろうと思つたのであるが、あまりの水圧にかきの骨が折

れて結局ぐっしょり濡れてしまった。そして

濡れてもともととすばやく滝下を通り抜け、
Vサインをカメラに向つてする程の余裕を見

せる兵藤氏に感服の意を表したのであつた。

なおも沢を進み、六メートル垂直の滝をザイ

ルを使用して越え、本沢最高の四〇メートル

滝に着いた。時刻は既に二時を回つていて、
で、巻きぎみに右上に登りトラヴァースして

落口に立つ。これで核心部はすぎ、ようやく

遡行のメドがついたといえる。少し上流で左
から入つてくる峠の沢を辿れば上部の省略は

可能だつたが、本流を選び奥の二股に着いた
のは三時近かつた。この頃になるともう五〇

分一ピッチのペースを守ることができなくな
り歩みも何となく元気がなくなってきた。も

うひとふんばかりと奥の二股より右沢につめを
求める。辺は既に源流状況を程している。し

ばらくするとヤブコギになり、上越の沢はた
いていこれだからとこぼしつつ、ようやく朝

日岳の左肩に出たのであつた。暮色せまる越
後の山々眺めつつ人気の無い稜線でたばこ
をくゆらしていると、多分に意識的な所はあ

るにしても充足感を覚えた。

しかしのんびりともしていられない。地下
足袋を運動靴にはきかえ、宝川温泉への道を

下り始める。かろうじて日が落ちる前に林道
へ出ることはできたが、宝川温泉に着いたの

は前神、兵藤両氏の歌謡曲メドレーのレパー
トリーも尽きた七時五〇分であつた。すぐさ

ま水上からタクシーを呼び、水上では食事を

する間もなく慌しく兵藤氏と別れ満員の特急
に乗り込む。寮まで帰りついたのは月曜の午

前一時であつた。充実しきつた山行、「長か
つた」というのが実感であつた。

今山行は九月の連休に予定していた、赤石
沢本谷のトレーニングの意味もあつたので、

体力の面でよい経験となつた。また上越の沢
は一般に草付が多く、高巻きを強いられ、ツ

メは悪い岩壁かヤブという印象を持つていた
が今回はヤブコギもさほどことはなく、明

るく楽しい沢であつた。日帰りというのは少
しハードに過ぎたかも知れぬが、岩登りとは

異なる、あの角をまがるとどんな滝があるの
だろうか、どんな美しいナメがあるだろうか、

という沢登りの素敵な魅力を再認識したので

ある。そして、万全の装備と心づもりをして

九月の赤石沢、五年来の憧れの沢に会いに行
こうという、一度はさめかけていた山への想

いを新たにしてくれたのである。美しい山で、
必ずしも美しくない人間が、自分の足と手で

精いっぱい自分の時を生きているのは、やつ
ぱり素晴らしいことだと思った。

(後日談) 待ちに待つた九月の一週間の休
暇、僕は南アルプスに居た。そして女人の人と
一緒に茶臼岳への登りを歩いていた。何も言
うまい、言われるまい、山は全て良し、全て
楽し。

赤石沢は六年来の憧れとなつたのである。

前号目次に誤りがありました。以下二点訂
正させて頂きます。

前 号 訂 正

前号目次に誤りがありました。以下二点訂
正させて頂きます。

一、古沢一郎 → 吉沢一郎

二、ケニア・ひとり旅 178年夏 ↓

ケニア・ひとり旅 177年夏 ↓

身辺雑記(III)

美しく老ゆること は難しい

吉沢一郎

この八月のある日、誰の紹介によるのか知らないが、『在家仏教』という雑誌の編集者から連絡があつて、『いのちの言葉』という欄があるので、何か心にしみる言葉があつたら、それを中心に短文を書いて下さい、とのこと。それで大急ぎで書いたのが次のように雑文になった。

(『在家仏教』53年11月号掲載)

凡そ宗教とは縁がないと思っていた私であるから、こともあろうに宗教関係の雑誌から、原稿の御依頼をうけようとは夢にも思つていなかつた。

私自身は無宗教だと信じているが(これも一種の宗教か)、年に二回だけは自分のお寺へ行く、というより、お墓へ線香をあげに行く。父と母と、前の家の骨がしまつてあるからである。

お寺と言えば先日、といつても数年前の先日であるが、親戚のある人の何回忌かがあった筈だが語と直してあつた)なるものを聞かされたことがある。法話ともなれば何か有難いことを言つてくれるのかと思っていたら、お世辞たらたらのいやらしい内容で、殆んど聞くに堪えないものであった。ああいうものもお布施?次第でどうにでもなるものと思えるが、有難そうに耳を傾けている人も可なり多かつたように見うけられた。

私が死んだらお通夜も告別式もお葬式もやつてもらいたくないと思っている。尤もこの三番目のものはお寺の営業妨害になるから、ごく内輪でということでなら妥協してもよいが、要は人に貴重な時間や大切なお金などを無駄に使わせるのが嫌だからなのである。酷暑や厳寒の候などには特にそうである。

いやそれ以上に私はそんなことをしてもらひだけの価値ある人間だとは思つていなかつた。それが私の信条というか人生観なのもある。その意味で、ロマン・ローランのだと思っている。

かどうかはよく知らないが、

『美しく死ぬことは易しいが、
美しく老ゆることは難しい』

私は十一月生れだから、あと三ヶ月で満十五才になる。これだけ生きればもう充分だと思う人もいるだろうし、まだ短いと焦せる人もあろう。

世間様にはいろいろ御迷惑をかけておきながら、好きなことだけをやつて来、やりたいことは一応私なりに満足のいく程度にやつてしまつた。従つて思い残すようなことはもう何もない。いつでも『一銭五厘』でお召しに応じるだけの用意は出来てゐるのである。

同年の親友Mが、一作年癌で死ぬ少し前に「いっちゃん、俺の分まで長生きしてくれよ」と言つて眼を閉じた。がこれからまた七十何年も生きるのはかなわない。

いずれにしろ、常識的に言えば、私の余命ももう幾ばくもない。せめてその短かい間だけでも、『美しく老い、かつ生きていきたい』ものだと思っている。

山中綺譚

小林重吉

明治大正の時代までは世の中が悠長だったせいか、所謂百物語という集りがあったそうである。蠟燭を百本立てて一人づつ怪談を話して、一本づつ蠟燭を消して行くと最後の一本の火が消えた時、ほんとうの怪異が出て来るという趣向である。私など怪談本や落語家の嘶など頭から信じないし、又恐ろしいと思つた事もないが、以下書き綴る経験談は、身を以て体験した事実を何等の脚色なくして書き流したものであるから、広い世の中には、斯かる現象もあるのかな、と思つて頂ければ幸である。

それと以下の二つの挿話は、何れも日本アルプスの山中で経験した事柄なので、登山に関心のある人達にとっては、多少の興味を覚える面もあるだろうと思われる。

物語としては「日本靈異記」などの非常に

古いものは別として、話の流れよりすれば、小泉八雲の怪談というよりむしろ上田秋成の「雨月物語」の中の一章に似かよつたような趣きがあると思つてゐるが、如何なものであろうか。前置きは此の位にして、以下が真に経験した通りの事実である。

その一 木曽駒ヶ岳のこと

昭和八年十月十日、私は森脇芳之君と共に伊那宮田側から木曽駒を経て空木岳、南駒ヶ岳に縦走せんとした。

入口の戸を押し開けるや否や、二人は重いリュックを土間の右手の板敷きの上に投げ出した。丁度その瞬間であつた。一人の男の姿が二人の視野に写つたのである。その姿は、いや影と言つた方が当つてゐるかも知れぬが、黙然として横顔を吾々に向けて腰を掛けておつた。身なりは着物姿であった。黒い縮織りの単衣である。裾をはしょつて居て、私の目には膝のあたりにはステテコのような足が見えていた。そして背中に行商人がかついで歩く

雪が来る迄はそこで生活しているのである。それから二日二晩どうしようもない嵐が続いた。三日目の晝まえに急に雲が切れて青空が拡がつて來た。親切な小舎の人々に別れを告げて、宝劍岳の直下の宮田小舎に着いたのは、陽は西に傾き稜線がわずかに薄明の午後四時半頃であつた。小舎は当然の事ながら無人であつた。平家建で盛りの頃は八十人位は泊れる大きさであつた。宝劍岳の岩峯が小舎の背にそそり立つていて、扉は閉じたまま静まり帰つておつた。

夜行で早朝に着き山に登り始めた時より雨であった。当時の気象予報などはまったくお粗末であったから分らなかつたが、かなり強い颪風が本州中部を襲いつつあつた。風雨は一刻一刻と強まり、五合目の木樵小舎に着いた頃は猛烈な暴風雨となつてしまつた。その小舎には十人余の樵夫と炊事婦が二人程居つて、ような風呂敷包が斜めに見えた。

異様な感じである。斯かる季節に、こんな場所、又その時刻にである。二人ともに何故だか、その時その人影に声を掛けなかつた。

今考へても分らない。兎に角も何となく話し掛ける気がしなかつたのだ。

その時の私の感じを思い出してみると、どうせ向うから何とか言つて来るであろう、そうしたら登山者でなくとも、夕飯の世話をぐらいはしてやらねばなるまい、こんな思いが一瞬の間ひらめいた事は覚えている。

当時の森脇君や私だから、氣押されたり、人みしりする如き気持は一切なかつたから、一声ぐらいは掛けそなものだつたが、何もしなかつたのだ。急いで水と薪を集めて来ねばならない。目前の急務があつたからである。半時間あまりすぎた頃は山稜も暗闇に呑まれ、星がまたたき出した頃に二人は小舎に戻つた。ランタンも灯し焚火も起こした。

だが先程の人影は忽然として消えうせていたのだ。その夜は台風の直後の寒氣流に覆われ、ひどい冷え込みとなつた。

シユラフに入つても焚火を落とせない。二

人は火種を消さないため、交互に起き合つて

翌朝を迎えたのだった。どれ程気温が下つた

か、翌朝二人の水筒の水がかたく凍りついていたことだけでも、その寒氣の酷しさが分る。

翌日宝劍岳を往復した二人は、縦歩の予定を取り止め木曽上松に下つた。

然らば昨夜、山小舎で見た商人風の男は、果して実在して居たのだろうか。吾々二人は色々の角度から話し合い検討してみたのであつたが、結論的には生きた人間ではなかつたに違ひないという事だつた。

吾々は五合目を昼に立つて來た訳である。或いはその夕刻から夜道をかけて人里に下つたのであろうか。然し、これもあの様な姿形で氷点下数度の山道を、折角の連れが現れた山小舎をすてて下るなどとは考えられぬ事である。他の山小舎に逃げたのであろうか。

当時は宮田小舎からは南北どちらの縦走路をとつたとしても、数時間の行程の距離にしか山小舎は無かつた筈である。

然らば幽霊を目の当たり見たとしか解釈のしようがないではなかろうか、後で考えれば怖ろしい感じであるが、その時は単純に変な奴が居たものだなと思つただけであつた。それから四十有余年たつた今、矢張りあれは世に謂う幽霊が現れていたのだと思う気持になつてゐる。

その二 飛驒蒲田温泉のこと
伊那側でも木曽側でも一切なかつた。

又一つ不審な点は、その時刻の点にある。先ずその日何れの側の山麓からしても、あの時刻に小舎に着いていられる筈がない。何故なら昼近く迄は相当の風雨だつたのだから。

此の山旅も今から数えると、最早や二十二年の昔の事である。前日（昭和三十二年九月七日）西穂小舎に泊つた吾々四人（近藤、村尾、小林、林）は、久しう振りに飛驒側へ下ろうという事になつた。小舎の直下から旧道

があるので、それをたどったのだ。久しく人が踏んでいないので、道の定かでない箇所が多く、気を使いながら、それでも午後四時すぎには、どうやら人里の路らしきものに行き着いた。

槍見から蒲田温泉への県道に出た時分には小雨は降つて来るし、足は重いしで、河原の水を横目に眺めながら道を急いでいる折に、土木工事用のトラックが下つて来て、それに頼み込んで最後の一時間余を楽をさせて貰えたわけだった。

蒲田では今田旅館に靴をぬいだのだが、当時は登山者が少なかつたとみて、その晩は吾々以外の客は無かつたようだ。そのせいかどうか、一番上等らしい部屋に通された。

此の時の宿は戦前からの古い建物で、それ以来私は飛騨側へは足を入れてないので、恐らく現在は新しく建て直されているかも知れない。玄関から一番奥まつた客間に吾々四人は通されたが、その客間は床の間つきで十二畳ほどはあつたと思う。

一風呂あびて六時半頃に部屋に戻ると、立

派な会席膳が五人前ならんで居たのだ。吾々は四人である。これはどういう事なんだ。腹のすいた四人の目には岩魚の焼物、山菜の煮物、汁ものなど山の宿としては第一級の料理が並べてあつた。五人前はおかしいではないか。掛けの女中さんに問いただすと、確かに五人様がお通りになつたと言うのだ。入口の番頭も五人のお客様が入つたのを数えている。念のためにつけ加えると、当日の夕刻には吾々以外の宿泊客は居らなかつたのだ。すると誰か一人陰の人影が一緒に宿に入った事になるのだ。それも女性の人であったと言う。

後の祭りだが、その時詳しくその風体や年頃を確めておいたら、今すこし具体的に書けたものにと惜しまれてならない。

らない。木曽駒の小舎の時でも、又蒲田温泉の時でも何れも時刻は夕暮であつた。そして無言であり又無音であつた。噫、何を訴えんとしたのであつたか。それも今や遠い昔話となつてしまつた。その時の同行者の一人村尾さんことベンちゃんも今や亡き人となつた。

同じ同行者の一人であつた近藤先輩との時お

りの座談の証しとして、此の小文を書き留めたわけである。

会務報告

西牟田 伸

一、評議員会

○日時 六月二六日

○場所 如水会館 第一談話室

○出席者 手塚晴雄、吉沢松次郎、中島孚、望月達夫、伊藤慈生、笠原広信、奥野巖根、甘利仁郎、沢木一夫、三井博、長沢道彦、原博貞、加藤正己、金子晴彦、西牟田伸一、加藤博行、他学生三名

○議事 年次総会提案事項の審議

二、昭和五三年度総会

○日時 七月四日

小林重吉 宮城恭一
渡辺嘉佑 大橋一慶

○場所 如水会館 南北日本間

評議員会議長

○出席者 (客員) 太田みつ (以下会員)

手塚晴雄、久保田礼治、鈴木英雄、黒田

三井博 長沢道彦

正治、望月達夫、佐々木誠、宮城恭一、
佐野茂雄、久保考一郎、山田亮三、原田

学生担当幹事 加藤正己 前神直樹

豊、樋口洪、大島理則、甘利仁郎、高崎
治郎、宮川次夫、吉田義則、佐雍恭、春

(6) 一橋山岳部事故経過報告及び会計報告
(7) 山行幹事の件 每年の新入会員をその任
にあて、年一回程度山行を企画する。

昭二八年卒、荒砥通虎、西村勝、伊藤助成

昭三三年卒、宮川守久

日井実、紫崎新、中村幸正、景山豪治、

本年度幹事 1 近藤泰

有賀盈、原博貞、加藤正己、俵昭、金子

(8) 遭難対策基金の運用及び山岳保険援助の

昭四〇年卒、三森茂充

昭四三年卒、金成剛

晴彦、西牟田伸一、藤本敏行、佐藤活郎、

件

近藤泰、他学生六名

大要以下を確認

○議事

(1) 五二年度活動報告

(2) 五三年度活動予定

(3) 五二年度決算及び五三年度予算 承認。

(4) 一橋山岳部五二年度決算及び五三年度予

算 承認。

(5) 評議員及び幹事改選

(旧)

(新)

評議員 日江井正己

久保考一郎

る。

(9) 以上で公式の議題は終り、出席者各自の

近況報告等で歓談した。

三、会員名簿発行に関するお願ひ

本年は二年に一度の名簿発行年に当ります
が現在以下の方々の住所が不明です。つい
ては、御存知の方は西牟田迄御一報下さい。

昭二八年卒、荒砥通虎、西村勝、伊藤助成
昭三三年卒、宮川守久

昭四〇年卒、三森茂充

昭四三年卒、金成剛

昭四六年卒、戸川哲哉

昭四八年卒、上田伸

(連絡先) 杉、高円寺南一一二八一一九

西牟田伸一

○遭難対策基金充実の為、本年度のみ会費
を一率千円増額する。

○遭難対策基金は会員及び学生の遭難に対
して緊急費用のみを負担するものとする。

○一橋山岳部に対し山岳保険の保険料 (一
人当たり年間五千円相当) を針葉樹会の一

般会計より援助する。

昭和五十二年度 会計報告並びに 五十三年度予算

会計幹事 加藤博行

○学生の遭難により填補された当該保険金
は個人名義ではあるが当会への収入とす
の会費の増収があり、会報発行費を初め余裕

を持って支出を賄うことができました。

しかし五三年度以降の予算を考えた時、物件費の高騰等の理由から四八年度より据置きとなつてゐる現在の会費では、会報発行（年三回）、会員名簿作成（年に一回）等の費用捻出が困難な為、五三年度より一律千円の会費値上げが、七月四日の総会で決議されました。

また遭難対策基金については、五三年三月の一橋山岳部の事故により約二二万円の出費があつた為、五二年度の残高が約四八万二千円となりました。このままでは今後、緊急時に不足をきたすことが予想され、とりあえず今年度中に百万円まで積立てることが総会で決まり、全会員より一律千円特別に収めていたところになりました。会費、遭難対策基金特別積立金共に、まだ収められていない方は宜しくお願ひします。

※針葉樹会新会費

卒業後四年以上の方……四千円

二年～四年……六千円

一年～二〇年……五千円

卒業後一〇年迄……四千円

※会費振込先

○郵便振替の場合

針葉樹会 東京六一一八三四五八

○銀行送金の場合

第一勧銀有楽町支店

普通預金口座番号

〇〇六一一六四一〇四一

針葉樹会代表 加藤博行

（会計報告及び予算詳細は28P別表参照）

一九七七年山行記録

鈴木英雄

^{3/4}湯本平に孫さん五周年の献花をして中川温泉に泊る。翌日宮城、久保、佐藤の諸君と共に大宝山に向つたが雪道に疲労し、小生は加入道小屋にて日向ぼっこをし諸君の登頂の帰りを待つ。^{5/12}鷹の巣山。単独行、以下皆同じ。日原から登り六石屋根を下る。道連れの人々に「そのザックは片桐ですね」と言われる。スポーツ品店の主人。昔話からこの頃の装備

のことなどを聞く。^{6/5}丹沢、蛭。大倉から登る。塔ヶ丘は賑やかで文字通り足の踏み場もなし。丹沢泊り。焼山から西野々に下る。

^{7/30}^{7/31}白山。金沢から別当沢出合、砂防新道を登る。子供連れが多いのは核家族の為か。

小学校舎の如き室堂も泊客二千人にて超満員。暑くてねられず戸外に出れば折から月明。そぞろ歩きの人影多し。翌朝受付にてガイドを頼むと「こゝ数日レンチヤンで皆ろくに寝ていなから無理です」「ゆっくり行くから道連れになつてくれればいい」「そのゆっくりを若い者はいやがるんですね。今日は岩間へ下る人が多いです。今からでも充分間に合いますよ」。今日は頂上と附近散策の積りだったが変更して岩間温泉に向う。下り数組、登り組には遂に遇はず、静かな北陸の山を味つた。

^{10/22}^{10/23}黒金、乾徳。東沢山の神、鷹見山を経て不動小屋泊。翌日黒金山、乾徳を経て徳和に下る。十二時間かかった。^{11/12}^{11/14}桧洞丸。

西丹沢等沢山の家からつづじ新道、桧洞を経て蛭の小屋泊り、翌日焼山、西野々へ下った。

柿原謙一

二月、志賀高原一ノ瀬スキー行。四月、笛子一大鹿峠—笛子ノ雁腹摺山—笛子峠—初鹿野、山田亮三、高橋、後藤。小瀧—明星山南壁展望—高浪池—野口—小瀧—大町、山田亮三、雨飾山と焼山がよく見えた。五月、大町—八方尾根春スキ—（八方池迄登る）—大町泊—籠川谷—マヤクボの下—大町、山田亮三、木村、花井、柿原息、同妻、二日とも快晴。

八月、大町—黒四ダム—平ノ小屋—ヌクイ谷—五色ヶ原、刈安峠—平ノ小屋、山田亮三、倉知敬、木村父子、柿原息、高橋、後藤。九月、水上—湯ノ小屋—上ノ原山莊—武尊山—前武尊—行小屋対岸—沼田、望月達夫、山田、大森、相当長い道のりでした。十一月、両神山、柿原息、同妻。秩父御岳山、単独、この山、二十一回目となる。

望月達夫

一月 尾高山（時間不足不登）青崩峠。高

川山。連行山、生藤山。二月、城峰山、八倉

峠。相州大山、仏果山。叶山。三月、立野峠、

秋山二十六夜山、寺下峠。觀音山、赤土峠、 $\frac{4}{3}$ 横尾山、信州峠、近藤恒雄、小林重吉、家

那須沢山。四月、黒平峠、水ヶ森、弓張峠。

野、御岳山。秩父路の樓かたくり今までに

壁原岳（鈴鹿）。大霧山。大博多山。六月、

上高地。七月、早池峯、中岳、鷄頭山、藥師

岳。魚沼駒ヶ岳、中ノ岳。九月、甲斐駒（橋

本レリーフ除幕式）。南八甲田猿倉岳、駒ヶ

峰、櫛ヶ峰、乗鞍岳、赤倉岳。那須流石山、

大倉山、三倉山、七ヶ岳。十月、沖武尊山、

家ノ串、剣ヶ峰、前武尊山。狭間峠、明神岳。

達沢山、冲ノ山、摺針峠。十一月、阿蘇外輪の俵山、冠ヶ岳、阿蘇中岳、高岳、根子岳東峰、祖母山。大日峠、勘行峰。大東岳。十二月、鶯宿峠、春日山、釧路ヶ岳、黒岳、御坂峠。

宮城恭一

$\frac{1}{2} \frac{29}{30} - \frac{1}{30}$ 鍋割山、久保、積雪二〇センチ。

$\frac{3}{5} - \frac{3}{6}$ 大群山、加入道山、針葉樹会員四名、白石峠より加入道山、大群山往復し、道志へ下る。アイゼンが効果發揮。 $\frac{4}{16} - \frac{4}{17}$ 、蛭ヶ岳、桧洞丸、久保、風雪の中を原小屋に入る。小屋に住みついている野兎が印象的。 $\frac{5}{3}$

$\frac{1}{5} \frac{5}{5}$ 、七面山、八鉱嶺、久保、敬慎院の大utronのザコ寝と精神料理には閉口する。 $\frac{6}{4}$ 、大菩薩峠から丹沢へ、単独。 $\frac{6}{5}$ 、高尾天平、

一水会、頂上近くのギンリヨウ草が忘れられなかった。 $\frac{3}{9} - \frac{3}{11}$ 、野沢、毛無山、佐々木誠、久

し振りにシールをつけて登った。今ではその必要もなくリフトで行けるとのことだ。 $\frac{4}{2} - \frac{4}{3}$ 横尾山、信州峠、近藤恒雄、小林重吉、家人他一名、金峰山の五丈岩がよく見えた。 $\frac{4}{11}$ 豪華絢爛咲き競いけり。家人同行。 $\frac{8}{24} - \frac{8}{31}$ カナディアン、ロッキー、主としてバス旅行、特にジャスパーからバンフまでの景観は天候にも恵まれ素晴しかった。

岩崎利一

$\frac{1}{2}$ 笠山、常平山、家人同行、雪を踏んで尾根を歩き、天文台のある常平山（八七五m）からは、新宿の高層ビルが蜃気楼の様に見えた。 $\frac{3}{9} - \frac{3}{11}$ 、野沢、毛無山、佐々木誠、久

保、 $\frac{7}{29}$ 、 $\frac{7}{30}$ 、早池峰山、単独。 $\frac{8}{20}$ 、 $\frac{8}{21}$ 、燕岳
 一餓鬼岳、一水会。 $\frac{9}{11}$ 、大岳山、単独、 $\frac{9}{17}$ 、 $\frac{9}{18}$ 、
 米背負峰、久保、田野鉱泉に泊る。峰への道
 を間違えやぶをこぎ途中であきらめ下山。南
 アルプスの全貌が良く見えた。 $\frac{9}{30}$ 、 $\frac{10}{2}$ 、焼岳、
 一水会。 $\frac{10}{16}$ 、カロ一谷遡行、久保、カロ一谷
 をつめて三ツドッケへでるつもりが途中で道
 がなくなり引返す。 $\frac{10}{29}$ 、扇山、単独。 $\frac{11}{5}$ 、
 $\frac{11}{6}$ 、大藏高丸、一水会。 $\frac{12}{3}$ 、本仁田山、单
 独、大休場尾根の下りは急で、奥多摩にもこ
 んな下りはあつたのか。 $\frac{12}{11}$ 、権現山、久保、
 雨降山付近の稜線の眺めは抜群。

久保孝一郎

1 / 2 - 1 / 4、奥利根スキー行、他一名、
 降雪で山に入れなかつたが上ノ原高原横断。
 1 / 14 - 1 / 16、八方尾根、下ノ樺までスキ
 ツアーハン例の懇親スキー。 $\frac{2}{11}$
 1 / 12 / 13、盤梯山、猫魔岳、おいらく山岳会、
 氷結の桧原湖をスキーで渡る。遼さん五年祭
 山行で大室山へ。 $\frac{3}{19}$ - $\frac{3}{21}$ 、乗鞍岳ス
 キーツアーハン。 $\frac{4}{2}$ - $\frac{4}{3}$ 、乾徳山、単独、
 十一月、北穂、二十六夜山。

青笹川を遡行、途中大手牧場寄りの尾根にと
 りつき師ヶ原に出で登頂。 $\frac{4}{16}$ - $\frac{4}{17}$ 、
 丹沢主稜、宮城。 $\frac{5}{3}$ - $\frac{5}{5}$ 、七面山、
 宮城。 $\frac{6}{18}$ - $\frac{6}{19}$ 、大菩薩峠、宮城。
 $\frac{8}{14}$ - $\frac{8}{16}$ 、八ヶ岳、他一名。 $\frac{9}{17}$ -
 $\frac{9}{18}$ 、大藏高丸、宮城。 $\frac{10}{1}$ - $\frac{10}{2}$ 、
 黒金山付金、他一名。 $\frac{10}{22}$ - $\frac{10}{23}$ 、常念、
 蝶ヶ岳、他一名、積雪期の常念乗越し、上高
 地入りの偵察行のつもりが、一ノ俣側の桟道
 を撤去されてしまつていた為、蝶ヶ岳に変更。
 連日快晴で穗高が良く見れた。 $\frac{11}{19}$ - $\frac{11}{20}$ 、
 湯ノ沢峠、妻同行。 $\frac{12}{11}$ 、権現山、宮
 城。 $\frac{12}{31}$ 、上高地入り、坂巻温泉で一年
 の垢をおとす。

藤本敏行

編集後記

会報第五三号をお届けします。

今日あたりから学生諸君は恒例の
 富士山合宿に行つてゐる筈です。も
 つとも、今でこそ毎年今頃になると
 大量の人間が富士へ富士へと向いま
 すが、二〇年もさかのばればきっと
 その数もたかが知れていたに違いな
 く、富士山を初めて冰雪訓練の場に
 と考えたのは誰だつたのかな、など
 とふと思ひます。合理的な「訓練」
 などといふものが、何時頃から始ま
 つたのかといふことも、併せて不思
 議です。おそらく昔は、ひとつのみ
 上を極める行為がまずあつて、その
 積重ねが結果として訓練になつてい
 たのでしよう。⋮⋮ともあれ冬山の
 季節到来です。原稿をお待ちしてお
 ります。

原稿送付先

〒236 横浜市金沢区
 富岡町三、一二四

藤本敏行

昭和 52 年度針葉樹会会計報告並びに 53 年度予算

会計幹事 加藤 博 行

| | | 52 年度会計報告 (52. 6. 1 ~ 53. 5. 31) | | | | | 53 年度予算 (53. 6. 1 ~ 54. 5. 31) | | |
|--------|--------|-------------------------------------|--------------|---------|-------------|--------------|--|-----------------------------|--|
| 会計年度 | | 51 年度 決 算 | 52 年度 予 算 | 52 年度 | 予算 / 決算差 | 53 年度 予 算 | 備 考 | | |
| 收 入 | 前期繰越会費 | 129,432 | 2,469 | 2,469 | 0 | 345,018 | | | |
| | 会費 | 530,000 | 565,000 | 942,000 | 377,000 | 735,000 | 会費値上げ費参照 | | |
| | その他 | 151,417 | 4,531 | 9,609 | 5,078 | 5,000 | | | |
| | 計 | 810,849 | 572,000 | 954,078 | 382,078 | 1,085,018 | | | |
| 支 出 | 会報発行費 | 523,640 | 402,000 | 372,980 | ▲29,020 | 405,000 | 印刷代 発送費 | 100,000×3 35,000×3 | |
| | 山岳部補助 | 120,000 | 120,000 | 150,000 | 30,000 | 150,000 | | | |
| | 通信費 | 17,800 | 20,000 | 8,000 | ▲12,000 | 20,000 | | | |
| | 印刷費 | 119,300 | 5,000 | 20,000 | 15,000 | 150,000 | 名簿印刷代 | 130,000 | |
| | 事務費 | 2,800 | 5,000 | 10,010 | 5,010 | 5,000 | | | |
| | 雑費 | 14,840 | 1,5,000 | 10,440 | ▲ 4,560 | 15,000 | 遭難対策基金 特別繰入 山岳部遭難保険 加入補填 その他 | 150,000 75,000 30,000 | |
| | 針葉樹発行費 | 10,000 | 5,000 | 3,860 | ▲ 1,140 | 20,000 | | | |
| | その他 | 0 | 0 | 33,770 | 33,770 | 255,000 | | | |
| 計 | | 808,380 | 572,000 | 609,060 | 37,060 | 1,020,000 | | | |
| 翌月繰越 | | 2,469 | 0 | 345,018 | 345,018 | 65,018 | | | |

〔収支内訳〕

○ 収 入

会 費

| | |
|--------|---------|
| 50 年度分 | 138,000 |
| 51 年度分 | 201,000 |
| 52 年度分 | 549,000 |
| 53 年度分 | 42,000 |
| 54 年度分 | 9,000 |
| 55 年度分 | 3,000 |

そ の 他

| | |
|-------|-------|
| 寄 附 | 5,009 |
| 印 稅 | 2,520 |
| 利 息 | 1,840 |
| 会合費余り | 240 |

○ 支 出

会報発行費

| | |
|------------|--------|
| 印刷費 (50 号) | 92,000 |
| 〃 (51 号) | 95,000 |
| 〃 (52 号) | 95,000 |
| 発送費 | 90,980 |

山岳部補助

| | |
|-------------|---------|
| 52 年度分補助 | 120,000 |
| *特別補助 | 30,000 |
| (日本山岳会への寄附) | |

通 信 費

会費督促状切手代他 8,000

印 刷 費

会費督促状印刷代 20,000

事 務 費

印鑑 (針葉樹会会長名) 6,700

帳簿その他 3,310

雑 費

会費集金経費 7,920

郵便振込手数料 2,520

針葉樹発行費

通信費 2,610

原稿用紙代 1,250

そ の 他

忘年会補助 23,720

香典 (故常盤敏太氏) 10,050

針葉樹会報 復刊第 53 号

発行日 1978年11月

発行人 針葉樹会 会長 望月達夫

編集人 藤本敏行

印刷所 大栄印刷
